慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本民族思想史の研究, 津田敬武著
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1923
Jtitle	史学 Vol.2, No.2 (1923. 2) ,p.94(254)- 95(255)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19230200-0094

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

られ、室町幕政研究の一好參考史料にして先年出版せられた。

次に足利幕府亡んで德川幕府起るに及び、親長なる者土佐より召されて家康に仕へ旗下となる。其の子孫親文なる者將軍の御側御用取次となり、小石川白山御殿の名園を同家の下屋敷として賜はつたのである。明治新政となり其の地は上地となり、親賢（博士の嚴父）は江戸を去り駿河國庵原郡嶺村に退隱したのであると。

猶寫眞の中に「舊蜷川家下屋敷即ち今の小石川植物園内の宇賀神」と記した蛇體があるが、甚だ珍しきもので神社研究者の好參考資料とならむ。其の説明に「此の寫眞は舊蜷川家下屋敷内に古來よりありし宇賀神の神體にして、今日蜷川家に保存せらる。此の宇賀神の安置しありし舊趾に今日稻荷明神を祭りありて、恰も古代より存在せしものゝ如くに裝い公衆に示し他の名所と同じく名所札を建立しあるは、大學の所爲としては歴史を無視したるものゝ如く余には見ゆ」とある。

最後に記して置くが、同家の正系圖の一部を寫眞に採りて本文中に加へられたならば讀むものゝ參考となつた處が多かつたであらう。大正十一年十一月六日　（武田勝藏）

日本民族思想史の研究　（澤田敬武著　大鐙閣發行）

著者の序の中に「歐洲大戰の影響を受けたる我が思想界は、非常なる混亂を呈し、ために國民の思想に何等の統一も無きが如くに見え、各階級のものが互に勝手なことばかりを考へ勝手な要求をするといふ始末、今尚此の混亂狀態が繼續して居るやうに思はれる。このまゝ進んで行くならば、我が國の將來はどうなるだらうかと、心ある者は竊かに憂慮して居るのである。◎中略　されば我が民族思想の内容を研究し、それに批判を加へる事は、洵に重大な任務である。◎中略　私は今日の時勢を慨し、我が國の將來を憂ふるのあまり、菲才淺野を省みず敢て本書を公にして一般讀者の叱正を仰ぐ次第である。」と本書を公にしたる意義を説明して居る。

本書は緒論の外十八章より成り、更に各章は節に分かる。猶本書には挿畫四十六ありて參考となる處多い。著者の注意通り第十六章我が國古來の淳風美俗と其價値より讀み始めたが、本章は本書の結論とでも云ふべき處にて、其の終に

要するに血統を重んずる事、家名を重んじ子孫を思ふ事、神社の祭祀の重要なる社會的及び行政事務として居る事「祭祀の通則として殊の外清淨を貴び、穢を忌み且つ善惡に對して倫理道德觀を發達せしめた事などは、我が國古來の淳風美俗として最も重要なものであつたと考へられる。此等の淳風美俗については、既に論及したのである。然しながらその眞價は此等の淳風美俗が祖先崇拜を中心として發達を遂げて居る所にある。換言すれば、すべて我が國の良俗は、常に國民的理想たる祖先崇拜即ち忠君愛國の精神によつて動かされつゝある所に其の歴史的社會的眞價があるのである。

と記し結んでゐるが、これが本書の眼目である。之と云つて批評する處はないが時宜に適した書として、一讀を勸める。大正十一年

十一月十一日（武田勝藏）

京都名家墳墓錄（附略傳並二碑文集覽）（寺田貞次編　山本文華堂發行）

本書は菊版上下二卷（二册）より成り、其の出版は其の凡例中に記す如く、諸名家墳墓の所在を明にし、其の湮滅を防き、參拜の便に資するを以て眼目として居る。其の收むる處は著者の參詣せる山城國内の諸名家の墳墓二千餘にして、大正の初に至る。其の記述は參詣者の便を計り京都を中心として五區に分ち、更に是れを小分してある。

次に本文は先づ人名を擧げ、其人に位階あれば其肩に記し、次に所在を明らかにし、それも各寺院にありては其の墓域を數域に分ち、南北東西墓域の名稱を用ゐ、各墓にては更に墓列の數と其墓列の一端よりの歩數とに依り墓碑の位置を定めてある。次に墓碑の寸法並に其の形式、次に刻文、最後に其の人の略歷を附してある。この略歷の終には其の引用書名を附してある事は非常に便宜を感ずるのである。又下卷の終には「索引」を附し、其れには第一御陵墓、第二名家、第三所在地にして、更に墓碑樣式圖を附してある。

要するに本書は京洛附近に存在する名墓の大部分を收むるを以て、同地方に遊ぶものは本書を繙き、自己の衆てより書籍等により知る故人の墓を訪れ香華を捧げ、其の靈を慰む事はあながち無駄の事であるまい。

紹介の序に著者に希望する處一二を記して置かう。本書には參拜の便のため御陵の名は揭げてあるが、其の說明を缺きたるは富岡鐵齋氏の注意によるとの事であるが、御陵と普通墳墓とは境を作りて記すか、或は又他の方法を以て不敬に渡らざる範圍に加へられむ事を希望する。次に墓碑の形式を分類したる「墓碑樣式圖」は參考となるべきものであるが、各圖が餘り小にして且數十圖を一頁に揭ぐるを以て甚だ複雜し、充分に其の形式を窺ふ事が出來ぬ、それ故再版の節には各圖を少しく大にし且つ一頁二十圖位にしてもらいたいのである。猶墓碑樣式の代表的のものを寫眞版として挿入せられたならば更に本書に光をそへると思はる。

先きに前號紹介の近畿墓石考大阪部出で、今又本書の公にせらるゝ事は吾等考古に趣味を有するものゝ喜ぶべき處である。我が三大都市中既に京都大阪の兩市は公にせられたるに東京のものは僅に一二あるも、それも一小部分に過ぎざるは遺憾である。篤志家の編纂せられる事を希望する。（武田勝藏）

大阪金石史（木崎愛吉編　上方文化協會發行）

さきに大日本金石史（三卷、附圖一函）の編ある好尙木崎愛吉氏は今回十二月廿五日其の續篇第四卷として氏の生所たる大阪並に其の郊外、府下に亘りて遺存する金石文中元和元年より元祿十六年に至る約九十年間、德川時代初期に屬する部分のみを蒐集編述せられ「大阪金石史」（六百十六頁）と題して公にせられた。